

シナモンテイ

島永 嘉子

譲だ、新宿駅の雑踏の中で後ろ姿を捉えた。グレーのパーカーで髪がやや長い。アメリカから戻ってきたの？ 間違いなく譲だ。真知は思わず早足で追う。改札口でポケットに手をやる仕草に立ち止まる。ふっと、力が抜けた。

譲ではなかった。別れて五年も経っている。同じパーカーを着ているはずもない。真知は来春結婚することにした。決めた頃から、なぜか、東京の人ごみの中で、譲だ、と目を凝らすことが多くなった。別れた後の苦しかった日々を思い出す。やはり会いに行こう。真知は決めれば早い。会社のステップ休暇という制度を利用し、三ヶ月のスキル向上の休暇をもらい、ニューヨーク州の北のはずれ、ナイヤガラ（注）の滝に近い大学町イサカ市にきた。

朝から雪になった。譲の留学先イサカ市での滞在も一ヶ月になる。譲はついぶん困惑したらしい。が、生来、親切で面倒見が良い彼は、三ヶ月間、安い家賃で部屋をシェアしてくれる女性を見つけてくれた。

「昨日の永さんの手作り豆腐は美味しかったね。本当の日本の豆腐の味を忘れていたと愕然とした」

真知は軽い驚きで立ち止まる。振り返った譲の顔に雪が降りかかり、雪の切片がすぐ小さな雫になる。

「こちらに来て五年だろう。自分の舌が日本人である証明をできなくなる時が来るかもしれない、とずしんと胸にきたんだ」

「日本人であることを証明できなくなる？」

「豆腐を味わいながら思った。自分の舌が味わい分けているのは、単純な記憶の味だけでなく、体の中の深くに、いろんなもののくっ付けて潜んでいるものだと」

言葉が途切れたまま、さらさらした雪が靴底できしみ鳴るのを聞き歩く。学生ホールの中に入ると、とろんとした暖かい空気に包まれた。高い天井の下で、大きな透明のテーパーポットから盛んに湯気が立ち上り、中で丁字と肉桂と紅茶の葉が回っている。舌が焦げそうに熱いシナモンテイの入った紙コップを持って、隅の椅子に座る。

雪が窓に白く筋を描きながら降りしきっている。

ゆるくくねる坂道に続くなだらかな丘陵が白く煙り、白さの向こうに木々の枝が黒々透けて見えた。

「そんなに深い根っこにある味なのに、忘れることがあるかもしれないって、はっとしたんだ。ベトナム語を理解するほどにベトナムの生活が体に侵入してくる。ベトナムの

待っていると軽く舞う雪の中を譲が急ぎ足で坂道を上ってきた。顔色が冴えない。

「待たせてしまった？ じつはヤナハが昨夜から熱を出して、やっと落ち着いたところなんだ」

こちらの友人からユズーと呼ばれ、あちこちで声をかけられる譲は、筋肉質のがっしりした体を動かし、体をほぐす仕草をする。徹夜で、疲れているのだろう。細面でしなやかな身ごなしのベトナム人のヤナハには、譲が開いてくれた真知の歓迎パーティで会っている。

彼女はこちらの寒さに弱くてねと呟き、切れ長の目を真知に向ける。ヤナハと同棲を始めて半年ほどと聞いた。

「真知の方は困っていることはない？」

不得意な英語に四苦八苦の有様を知っているから、譲の方が忙しいのに気遣ってくれる。

名目とはいえ、スキル向上の休暇だから、レポートは作らなければならぬ。会社の配置配属などの人事に役立つ新しい心理検査や能力検査について調べている。

「大丈夫とも言えないけど、昨日おそるおそる産業心理の教授に会ってきた。参考資料もくれたの」

「そうか。真知は物怖じしないからね」

二人で笑う。譲はいつもずっと寄り添ってくれる。

しばらく黙って歩く。雪は羽毛のはかない軽さで白く舞ってゆっくり落下していく。

味にも慣れてきた。美味しいけれど違うって、舌は言うけれどね。まだね；；；」

譲は雪を見つめる。

「だけど、どんなに言葉が流暢になっても僕は薄っぺらだ。ヤナハは兄と祖父を殺され、自分の住まいも焼け、叔父は焼け爛れて亡くなり、親しい人たちが戦場で殺された。戦争が終わって何年も経つのに、ヤナハの苦しみは癒えない」

「そうなのか。譲はヤナハの負った辛い傷と共に一生を過ごす覚悟をしている。それは日本人の舌が味わう、深くに根ざした沢山のを、忘れることさえ厭わない覚悟なのだ。譲は母一人子一人で育った。料理の上手な人だったと聞いた。母は譲の留学の前に亡くなっている。」

雪は外の音も室内の音も吸い込み、静かに降り積もっていく。シナモンテイが喉に染み込み、頬が火照る。

「お母様の味も豆腐の味も忘れてほしくないけれど。譲の気持ちがちがち鳴っている。ほぐしてね」

肩を揉んでやりたい。譲は笑ってシナモンテイを飲む。

「日本語は優しい響きがする。それとも真知の声が優しいのかな」

思いがけない言葉を置いて、譲は雪の中を図書館に向かって行った。

ヤナハから、譲の訃報が届いた。四十七歳だった。